アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル　愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

ーあいなん音故地新ー　「居場所」

追いかけるものによって自分の居場所が変わる。ハエを追えばハエが好むような場所に、チョウを追えばチョウがいる花畑にたどり着く…これはあるドラマで上司が部下にかけたせりふ。そのとおりやと思った。

この春に卒業を迎え巣立つ子どもたち、この町を離れる子どもたち、夢を描くのは自由やからね。どんな夢を見てもいいんよ。いつだって夢は大きく、目標は背伸びした自分の手が届くか届かんかくらいのところに置いて、ひとつずつクリアしながら抱いた夢を追い続けてほしい。ただひたすらに追いかけて、走って、ふと気がついたら、知らん間に花畑にたどり着いとるはず。力を貸してくれる仲間や、応援してくれる友人に囲まれて充実した時間の中にいることができるやろう。

疲れたときは休んで、つらくなったら逃げてもいい。そのときは愛南町に帰ってくればええんやからね。ここはいつでも歓迎してくれる。帰れる場所があるっていうだけで耐えられることもあるからね、乗り切れるときがあるからね。ふるさとってそういう場所やからね。

今、あなたの心の中にともった火が夢叶うまで燃え続け、あなたの進む道を照らし続けますように。卒業おめでとう。

（テノヒラkiku）

本日！海日和!! vol.124

「水深 20 メートルの世界」

３月５日は語呂合わせでサンゴの日だ。愛南町を代表するのは、エンタクミドリイシやクシハダミドリイシなどのいわゆるテーブルサンゴだが、今月は少し変わったサンゴを紹介したい。

水深 20 メートル近くまで潜っていくと、太陽の光も少なくなり、薄暗いモノトーンの世界が広がってくる。潮通しの良い場所で、海底からユラユラとロープのようなものが伸びていることがある。黒っぽい色をしているが、カメラのストロボを光らせると、白・黄・オレンジなどカラフルな色が現れる。

色はさまざまだが、同じムチカラマツという長さ２メートルほどのサンゴだ。サンゴの芯には、とげの生えた黒色の骨格があり、ポリプ（サンゴの本体）がしっかりと絡み付いている。

水中をユラユラと漂い、頼りなさそうに見えるが、強い潮の流れをうまく受け流している。そのためム

【ムチカラマツと骨格】

チカラマツの表面には、ガラスハゼやムチカラマツエビなどさまざまな生き物が住んでいる。ここでもサンゴは多くの生き物を支える海のオアシスである。

（撮影地：横島）

愛南サンゴを守る会　西尾知照（ともてる）